

えぽく

第2巻4号通刊13号 2001年4月20日発行
合資会社金井書店発行 営業本部編集
〒161-0032 東京都新宿区中落合42-116
TEL 03-59962888 FAX 0339537851
URL <http://www.kosho.co.jp>
E-mail office@kosho.co.jp

スタッフのメッセージ

子どもの頃、デパートの中で一番好きだった売り場は、家具売り場でした。小学校の中学年頃から探偵小説に魅せられていた私は、その頃、『秘密』のあるものにあこがれていました。秘密の「扉、部屋、地下室等々。大人になった時にはそのような秘密を持つ家、というより「屋敷」に住んでみたいと心密かに想うほどでした。(現実には、そのような屋敷を持つ必要がある人というのは、後ろ暗いお金を持つ人だけでしょう。)

秘密好きな子供が手近なところで気に入っていたのが、「鍵付きの家具」だったのです。家具売り場の端から、鍵付きの引き出しを一つ一つ見て回りました。開けて閉めて、を繰り返します。親はその間に別の売り場に出かけています。子供一人で筆筒一つ買うつもりで品定めしているように見えていたかもしれません。鍵がついていれば宝箱やオルゴールにも興味を示す子供でした。

さて新店舗のR.S.Booksに、そんな私をワクワクさせてくれる仕掛けがあります。鍵付き引き出しのついたテーブルと、隠し戸のある展示窓です。この引き出しを見たときに感じたワクワク感は、言葉では言い尽くせないものがありました。鍵が合ったときの微かなカチッとした感触が何とも言えず楽しいのです。当然、店長の権限と言わんばかりに、鍵付きの引き出しに展示する本は私が選びました。開店当初は、大好きな川上澄生の豆本を、4月後半は竹久夢二の抒情画集が入っています。

こんな他愛もない喜びが、仕事を頑張るときの張り合いにつながっているのかもしれませんが。

八重洲古書館・R.S.Books店長 渡辺明子

新しい形・ご提案

2001年4月2日(月)新しいスタイルで古本屋が誕生しました。私がこの業界に携わり約30年がたちますが、より多くのお客様にご利用いただける古書店づくりという目的で研鑽して参りました。その一つの結論が今回ご提案しました『R.S.Books』です。既に、ご利用戴いた読者の皆様、ご感想は如何でしょうか？

従来の古本屋は、専門すぎたり、入りにくかったり、新刊書店と比べると読者の皆様に敬遠される面があったものと思います。65㎡程の小さな店舗ですが、“ちょっと入ってみたいくなる”、“きれい”、“面白そう”、そんな印象から、立ち寄っていただける空間と商品構成で組み立ててみました。意識して通路も目線も低く抑え子も置かれてお目当ての本をます。その結果、の店舗と比べると、古書マニアの方にはもの足りない店舗となったことと思いますが、幸いなことに、同じ八重洲大地下街に『八重洲古書館』と言う本に埋もれた店舗がありますので、目的に合わせたご利用をいただければ幸いです。



八重洲エリアにおいては、<メンバーズカード>を発行して“売っても買っても特典付”をうたい文句に、ご利用実績に基づいてサービスをさせて戴いております。八重洲大地下街の企画と併せて、一年中お楽しみいただけるよう工夫して参ります。外出にもたいへん爽やかな季節です。たびたびのご来店をお待ち申し上げます。

金井書店目白本店、八重洲古書館、R.S.Booksとコンセプトの違う店舗、古書目録とインターネットの通販、ぐるりや会と伊勢丹大古本市の出版販売、いろいろな形で古書古本を売買して環流させており、読者の皆様にお役に立てるよう、スタッフ一同研鑽して参りますので今後ともよろしく願い申し上げます。

金井書店グループ営業本部 花井敏夫
スタッフ一同

最新情報はインターネットホームページをご覧ください。
<http://www.kosho.co.jp/>

RETRO = 懐古趣味
REVALUE = 再評価する
RECYCLE = 再利用、環流する



TEL & FAX 03-3272-2888
営業時間 10:00~20:00



TEL & FAX 03-5204-2888
営業時間 10:00~20:00
(土日祝 11:00~19:00)

〒104-0028 東京都中央区八重洲2-1 八重洲地下街
年中無休(元旦のみお休みさせていただきます)

ご意見ご感想ご提案をお待ち申し上げます。
下記宛にお寄せ下さい。

金井書店営業本部
〒161-0032 東京都新宿区中落合42116
FAX 03-3953-7851
E-mail: office@kosho.co.jp

趣味の文化展

幻想文学に酔う

『幻想』とは、何か。聞こえるはずのない音を聞いてしまったら、それは『幻聴』とされるでしょうし、見えるはずのないものを見てしまったら、『幻覚』を見た、といわれます。つまり幻とは、現実においてありえないとされているもの、と云ってしまっても間違いではないと思います。そこから考えると、『幻想』とは、現実にはありえないもの(=幻)を想像すること、ということになり、『幻想文学』とはそういったものを内包する作品、ということになるのでしょうか。

そもそも、日本において『幻想文学』という呼称が用いられるようになったのは、そう昔のことではありません。

1960年代の後半に始めて登場し、70年代の半ば頃には定着した、といわれています。しかし、実は現在に至っても、『幻想文学』の定義は、未だに確立されたとは言いきれません。

『幻想』とは何かはこの『幻想』きく違います。方も、人によつて、人を説く人によります。

そうした上で、かなり広げられてはならぬ『学』として挙げ

られているもの、またいわゆる『童話』の中にも、『幻想文学』といえるものが出てきてしまうし、『異端文学』とか『神秘文学』などと総称される数々の作品はもとより、怪奇・奇伝・ホラー・サイコ・SFファンタジーなども、当然『幻想文学』という範疇に入ってくることとなるでしょう。例を挙げると、泉鏡花や幸田露伴、また三島由紀夫や石川淳といった面々にもいきあたりますし、江戸川乱歩や中井英夫をはじめとする大正～昭和の探偵作家、筒井康隆や井上ひさしにみられる作品群など、枚挙に暇がありません。これに、フランスやウィーン、アメリカなどの諸外国の作家が入ってくるとなると、もうあまりにも漠然としてしまいます。また、非常に残念ではありますが、紙面の

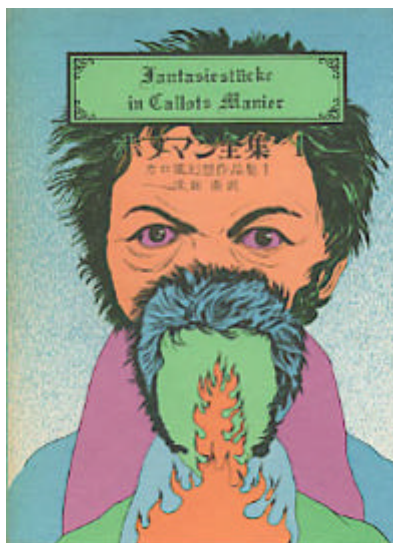
関係上、それら全てについて言及するというのは、難しいと云わざるをえません。そこで、今回は、日本において『幻想文学』という概念が登場する、その時代に照準を合わせた形で、日本の『幻想文学』の世界を体現したといっても過言ではない、1人の作家を中心に、見ていきたいと思ひます。ではその『幻想文学』を愛好する人にとって、知らぬものはない作家とは、誰か。第一人者をもって任じられている、『瀧澤龍彦』を答えとして挙げる人が、大方のところではない

幻想文学 構造と機能

フジ・オノ・エッセイ

藤田隆彦著

創田洋行



切れない部分があります。先に、か、ということに触れましたが、実の概念そのものが人によって大すると、当然『幻想文学』のとらえて全く異なる、ということで、それ、まさに十人十色といった感が

『幻想文学』を語るということになる範囲の作品について言及しなくってしまいます。通常は『近代文学』に分類されるものや、『探偵小説』に分類されるものや、『童話』に分類されるものなど、





かと思えます。

澁澤龍彦といえば、「サド裁判」を連想される方は、多いと思います。これは、現在まで続く、芸術と猥褻を問題とした裁判で、1961年に起訴を受け、69年の最高裁の判決をもって結審となります。猥褻を問題とした裁判は、他にも「チャタレイ」や「愛のコリーダ」など、いろいろとありますが、とりあえず今回は割愛することとします。ただ、この裁判は、日本に『幻想文学』という呼称が登場して、成長してゆく過程での出来事である、というのが、とても重要なのではないかと、思います。結果としては、被告側の敗訴とい



う形での結審となりますが、裁判中も、そして、その後も、澁澤龍彦の活動は衰えることはなく、下喉頭癌で59歳で死去するまで、多くの小説やエッセイ、翻訳を發表しました。略歴にもなっていない紹介ですが、彼の遺した作品は、当ても現在も変わることなく、とても多くの人々に影響を与えています。どちらかといえばサドの翻訳者や博覧強記で独特の世界が垣間見えるエッセイストとしての澁澤龍彦が有名なようですが、小説家としても、優



れた作品が多くあります。終生、茶目でいたずらな子供の心を忘れなかった人のようで、その博識ぶりも、「そんなことも知らないのか」ではなく、「こんなことを知ってるんだぞ、すごいだろう」というような雰囲気だったのではないかと想像されます。また、裁判などにおける彼独特のポーズや、友情に篤く、澁澤サロンともいわれる友人達との付き合いなど、彼を語る人によって、様々な顔が見えてくる人でもあり、その作品における澁澤龍彦のイメージとは裏腹に、ストイックな人でもあったようです。それらは、もしかしたら彼の根底にあった子供心からきているのかも知



れません。そんな彼の筆によって紡ぎだされる世界は、豊富な知識に支えられているにもかかわらず(それとも、だからこそかもしれません)、縦横に駆け巡る想像の翼に乗って展開される、幻想的な異空間とも呼べるものです。『幻想文学』が、こういった範疇で語られるにしても、決して見落とされることはない、そういった部類のものであるのではないのでしょうか。



こうした澁澤龍彦の名前とともに出てくる文学者たちは、これもまた『幻想文学』の世界では、お馴染みの人々といえます。思いつくままに挙げても、稲垣足穂、埴谷雄高、種村季弘、加藤郁乎、須永朝彦など、いくらでも出てきそうな雰囲気です。それぞれについては割愛しますが、いずれも興味深い作品群を有する人たちであるのは、間違いありません。



先にも述べたとおり『幻想』という概念そのものが今なお統一されていない、という状況を考えると

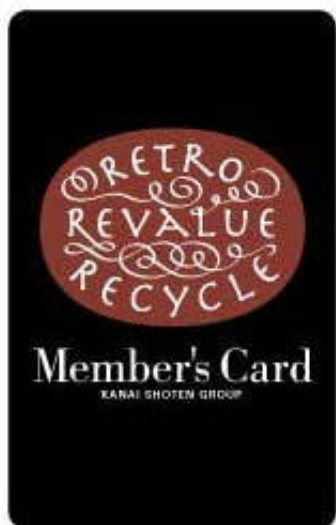
いままで述べてきたことは、あくまでも主観における『幻想文学』ということになってしまい、それは違うという方もいらっしゃるかもしれません。しかし、それで良いと思うのです。統一見解が確立されていないということは、例えば、自分の意見が、どれ程少数派であろうと決して間違いではない、ということになります。これは、とても素晴らしいことではないでしょうか。この度の“趣味の文化展”に合わせて、店頭にもコーナーを設けています。その中には、きっと様々な作品があることと思います。それこそ、純文学からファンタジーまで、といったことになるかもしれません。その中から、皆様1人1人が、自分だけの『幻想文学』を探し、また出会えるならば、それこそが本物だといえるのではないのでしょうか。

(文責：川上亜衣子)



4月より 新しい メンバーズカード誕生！

金井書店グループメンバーズカード



売っても 買っても 特典付
店舗毎に特典が工夫されています
特典内容は各店でご確認ください

従来の、ポイントカードはメンバーズカードに移行させていただきますので、ご了承ください

R.S. Books

ゆったりとした空間と、
選りすぐりの書物を用意しました。
時代を刻んだものとの
素敵な出逢いを愉しめる、
新しい形のブックショップです。

TEL & FAX
03-5204-2888

東京駅・八重洲地下街



八重洲古書館

RETRO REVALUE RECYCLE

在庫5万冊、
新しい本から価値ある本まで
幅広い品揃えで話題の店。
読み終えた本、昔の本を
お売りください。

TEL & FAX
03-3272-2888



<http://www.kosho.co.jp>